

2016年に制作したものです。ポーランド人の視点から、ピウスツキの波乱に満ちた生涯に光を当て、樺太アイヌとその文化について、あたたかい眼差しを向けた内容でした。映画の冒頭、ピウスツキの弟ユゼフの曾孫で、民族学者のダヌタ・オニシュキェヴィチさんが、帝政ロシア時代にピウスツキがサハリンに流刑となった経緯や、樺太アイヌやニヴフ、オロッコの人たちとの交流について淡々と語ります。

続いてピウスツキの妹の孫のヴァイトルト・コヴァルスキさんや、歴史学者のクシシトフ・ヤブウォンカさんが登場し、ブロニスワフとユゼフの兄弟の絆、リトアニアでの生い立ち、1887年にサハリンから父に宛てた手紙を紹介し、彼の心情に迫っていきます。そして現在に至り、アダム・ミツキェヴィチ大学のアルフレッド・F・マイェヴィチ名誉教授と井上紘一北大名誉教授が、日本とポーランド両国の学術協力により、ピウスツキ研究が一段と進んだことを明らかにしました。

当時のポーランドは、ロシア、オーストリア、プロイセンの3国に分割され、第一次大戦後までの123年間、世界地図上から消えていました。それゆえに、ポーランド人としてのアイデンティティを持ち続けた、彼の業績を掘り起こそうという、チェホスキ監督の熱い思いが伝わってきました。

この後の座談会では、直木賞受賞作の『熱源』について、活発な意見交換がありました。著者の川越宗一さんは、北海道新聞(2020/7/31)のインタビューで「虚構混じりの小説という手法自体が、事実そのも

のを伝えるには不向きです」、「虚構と事実を等価に扱って、そのテーマに向かって書いていくのが小説なんだろうと思います」と述べています。

私個人は、この小説からは「汗のにおいがしない」という感想を持っています。仮に著者がサハリンの極寒を体験し、ポーランドを訪れ、アイヌの人たちと深く交流していれば、内容はもっと違っていたのではないのでしょうか。

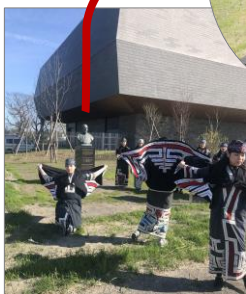
これとは対照的に、アイヌ民族に詳しい哲学者の花崎皋平さん=写真右=の著作『チュサンマとピウスツキとトミの物語 他』(2018)には、ぐいぐいと引き込まれる迫力がありました。鮭やフレップ(野イチゴ)に恵まれ、「何が欲しいとも何が食べたいとも思わずに、ゆったりと過ごす暮らしでした」との記述には、長編詩とともに共感を覚えました。

ところで、会場の様子を千歳高校放送局の女子生徒2人が、取材していました。年配者が多い中で、ポーランド的な表現をするならば、まさに「花が咲いたよう」でした。若い世代が、こういう機会に日本とポーランドを結ぶ歴史を学んでくれることは、嬉しい限りです。

(さきかわ・しんいちろう、高知工科大学客員教授)



↑ 2020/7/30



B・ピウスツキ 102年忌〜ウポポイ National Ainu Museum & Park のピウスツキ像前で、職員がアイヌ古式舞踊を奉納しました。オンカミ(拝礼)のあと「鶴の踊り」と「刀の踊り」を披露しました。(5/15)

## ウポポイ (民族共生象徴空間) 開業 ブロニスワフ・ピウスツキ 記念像の再披露



パヴェウ・ミレフスキ駐日ポーランド共和国大使が、白老町旧社台小学校で一時保管中のブロニスワフ・ピウスツキ像を訪問しました。(2/3)

新型コロナウイルス禍で開業が遅れていた、白老町のウポポイが開業しました。(7/12) 開業に先立ち、記念式典が行われました。(7/11) かねて式典参加を希望していた、ポーランド関係者の参加は叶わず、残念。(安藤厚)

=写真提供=駐日ポーランド大使館/野本正博/尾形芳秀/松山敏